

哲学研究

第五百四十九号

第四十七卷
第七七册

人類はなぜ人類なのか

——「未完の人類」——

一 人類学の中心課題

江原昭善

「人類の祖先は？」とよく聞かれる。これまでも繰り返し同じことが聞かれてきた。これほどまでに問ひ古され
ていながら、しかも依然として私たちの興味をそそり続けるのはなぜだろう。

洋の東西を問わず、いつの時代でも、どのような未開の部族でも、かならず彼ら自身の伝説や神話や部族信仰を持
ち、「自分たち」の遠い祖先や素性や由来について力強く物語っている。つまり、これらの伝説や神話などを通じて、
彼らは「自分たち」の直系の祖先を明確にし、祖先を共有するというこの意識は同族意識となり、連帯感を強化し、
それによって他部族との相異や優越感が強調されてきたのである。

このような部族集団は、外部に対しては排他性を持ち、内部では同族意識を核とする凝集力をもった集団である。
それ故、ある一定の環境内では、各々の部族集団は集団間の不必要な摩擦をさけて「すみ分け」し、それぞれの「な

わばり」を確保することにより、衣食住を確保し共存を可能にしてきた。繁殖という面からみても、それはインセストを回避し、種 (species) として生き残るための種族維持機構を内蔵した繁殖・育児集団の役割りも果してきた。

このように考えてくると、同族意識の強化は人類にとって生き延びるための適応戦略のひとつだったともいえる。それが、やがて善かれ悪しかれ中華の思想や民族精神や愛国心となって生き続け、排他的に団結心を固める機能をも果すようになったことは、いうまでもない。

これらの個々の部族集団では、それぞれ集団が形成された瞬間から、集団内のしきたりや掟が発生し、構造性をもつようになる。そのソフト的側面が「トラディション」であり、ハード的側面が「社会」だといってもよい。

人間は生まれ落ちた瞬間から、このトラディションの網ですくい上げられ、このトラディションの羊水のなかで育てられる。そしてこのトラディションのなかで、しきたりや掟を身につけ、行動の仕方を学習して、集団の成員となる。その中心にあるものが、ルーツを同じくするという同族意識だったのである。だから、私たちが自らの出自を問う普遍的傾向のなかには、以上のような深層心理があったということができよう。

このような同族集団は、すでに原人類 *Homo erectus* の段階では形成されていたことが、考古学的にも確認されている。その出現は、実際にはもっと古く、猿人類 *Australopithecus* の段階でも存在していただろうと推測されるが、いまのところ、直接的な証拠はない。このことについては、あらためて後述することにする。

一九六五年の末頃、フランスのニース郊外で前期旧石器時代に属するテラ・アマタ遺跡 (Terre Amata, 約四〇万年前) が発見された。そこでは十一層にわたって二一棟の建造物の跡が重なるように出土し、季節ごとに遊動生活していた原人たちが、この地域に戻ってきては住みついた痕跡が認められる。これらの世界最古の建築物の構造や部屋の大きさから、発掘者 H・ルムレー (H. de Lumley) は、ひとつの建物には一五人以下の原人たちが同居していた、

と推定している。

事情は旧人類 (*Homo sapiens neanderthalensis*) や新人類 (*Homo sapiens sapiens*) クロマニヨン人以後、現代人までを含む) になっても、あまり変っていない。たとえば、マグダレニアン後期 (10,000~9,000 B.C.) の流浪民の住居がセーヌ河岸で発見されたが、その睡眠場所の広さから、構成人員は一五〜一〇人と推定されている。

これらの家族的集団がいくつか寄り集まって同族集団を形成し、その大きさは生態学的・集団遺伝学的に五〇人内外だっただろうといわれている。

死者を埋葬するという習慣が、かなり普遍化したのは、中期旧石器時代の旧人類になってからのことである。つまり、旧人類のあいだでは部族信仰がかなり有形化したと考えるもよい。そして後期旧石器時代になると、儀式や祭礼の遺物の出土が飛躍的に豊富になる。しかし、部族信仰の域を出るようなことはなかった。

「自分たち」という即自的な捉え方が、抽象化・一般化されて、いわゆる「人間」というレベルで理解されるようになったとき、部族信仰ははじめて普遍性をもった宗教へ脱皮することが可能になる。そしてそのためには、各部族を包含したエトノス (Ethnos) の存在が前提となるだろう。とすると、その時期は新石器革命 (G. Child; 1936) 以後ということになる。

人類の精神活動は、このようにして部族信仰的レベルから普遍性をもった宗教へと上昇したが、一方で知的活動は哲学を生み出した。つまり、この時点において、日常的な生活に密着した経験知や技術知のレベルからの離陸が可能になった、といっても過言ではあるまい。

このようにして、部族信仰に基づく神話や伝説が、文学や宗教や哲学を生み出す母体となり、ついには科学の形をとるようになるのだが、これを逆に言えば、文学も宗教も哲学も科学も、どこかで人間を求め、人間に帰着する性格を内包しているといえよう。それ故にこそ、それらはさまざまな人間観・人間像を作り上げてきたことは、あらため

ていうまでもないが、今更ながら人間現象の幅の広さと奥の深さに感歎せざるをえない。

この場合に、「人間」という存在を客観的にとらえて「人類」という対象として扱うならば、すでに科学の領域に入り込んでいることになる。そして「自分たち」を問い、「人間」を問うたように、「人類」を問い、その起源を求めるとは、人類の生い立ちを明らかにすることであり、それはそのまま人類のもっとも奥深い本性を解明することにつながる。

このようにみえてくると、人類学という学問は、すでにギリシャ時代にまでさかのぼってその萌芽をみることができ、それ以来まさにこのあたりを中心課題として発達して今日に到ったといっても過言ではない。

二 サルとヒトをつなぐ論理

この人類学は、ほぼ一九五〇年を境として大きく転回した。それまでは進化論が定着したとはいえず、人類進化論とは名ばかりで、ずっと起源論のレベルに留まったままだった。そして旧人類ネアンデルタール人や、原人類ピテカントロプス (*Pithecanthropus erectus*) やシナントロプス (*Sinanthropus pekinensis**) の化石が発見されても、それらが果して「人類の祖先か否か」とか、また彼らが「サルかヒトか」という二者択一の議論に終始するのが常だった。いふならば、発見された化石が「どの程度現代人 (*Homo sapiens*) に似ているか」という問題に帰着した。とはいっても、人類という概念が科学的に確立していたわけではなく、暗黙のうち現代人を比較の尺度にしていたにすぎない。

* 現在これらの名称は学名としては *Homo erectus* にまとめられた。便宜上俗称として使用されることがある。

やがて、このような尺度が役に立たなくなった。原人類の実態が解明されるにつれて、理解しがたい事実が次々と浮かび上がってきたのである。彼らの脳頭部は現代人の六割くらいの大きさで (700~1200 立方センチ)、額は低く、眼窩上縁の部分はゴリラやチンパンジーよりも肥厚して、ひさしのように前に突き出ており (眉上隆起)、見るから

に原始的である。ところが骨盤や下肢の骨は現代人とほとんど違わない。さらに困ったことには、火や石器は十分使いこなしているのに、人類としても忌むべき殺人・食人風習をもっていたことが明るみに出てきたのである。こうなると、もはや現代人を尺度にして、「サルかヒトか」とか「人類の祖先かどうか」という吟味はあまり意味をもたず、なぜそのようなことになったのかが説明されなければならない。つまり、人類進化のメカニズムが解明されなければならない。ここで人類学は初めて、記述的段階を超えて科学的になったということができよう。

このようにして人類学者たちは、人類進化のメカニズム解明に意を注ぎ始め、それまで断片的にしか研究されていなかった霊長類に目をつけ始めた。そして、ただ研究室で思索に耽るだけでなく、彼らを求めて熱帯降雨林のジャングルや、危険な山岳地帯やサバンナ奥地にまで入り込んでいって、その実態調査を開始した。手応えは十分で、霊長類の研究は人類の覆われた特徴を次々に明らかにし、ヒト化 (hominization) のメカニズムを理解するのに最適の対象であることが認識されるようになった。いわば人類学の差し迫った状況が、霊長類学 (primatology) という新しい学問分野を生み出したことになる。

ちょうどこの頃、生物学では正反対ともいえる二方向への分極化が進んでいた。一方では生物の根源的現象である生命の領域に迫ることが可能になった。それまでは宗教と哲学しか立ち入れなかった生命の秘密の扉が、生物学によって開かれようとしていたのである。生物を細胞レベル、遺伝子レベル、分子レベルに解体して研究する技法は長足の進歩を遂げ、生命の物理・化学的メカニズムは、あたかも精巧なコンピューターの部品を見るように眼前にさらけ出された。その結果、生物学における、いわゆる還元主義の風潮はいちじるしく強化された。しかしながら他方その分だけ、そのような単純な還元主義に対する批判も強くなった。生物を物質次元の言語で説明しようというのではなく、まず生物を生物として捉える。そして、生物を形態・生理・心理・遺伝その他の個々の部分的現象へと解体していく技法とは逆に、それらの成果を統合して、ついには生物の個体レベルを超えて、集団ないし種レベルで考察しよ

うとする傾向も強化された。

このようにして、一九五〇年以降、生物学はまさに互いに逆方向に分極化する両分極の上に、止揚されたかたちで存在し、物質を改善してきたのである。

水素と酸素の原子が一定の割合で化合すると、まったく質の異なる水になるように、無生物と生物のあいだにも、ある幅をもった臨界領域をはさんで、それぞれ異なる法則の支配する質的に異なった次元を見出すことができる。さらに生物の体制や構造や機能が高度化すると、精神・文化活動を可能にする別次元の世界が出現する。これらの臨界領域を介して、質的に異なる三種の次元（物質次元・生物次元・精神次元）の現象を説明し得る原理は、本来それぞれの次元のなかに見出し得るものである。

この三次元は、現時点でみると、自然の上・下部構造の断面を示すが、時間軸に沿ってみると、自然進化の継起にもなっている。したがって生物学の分極化に伴い、物質と生命の間に横たわる臨界領域は生命の起源・進化としても扱ひ得る。また、身体と精神の間を流れるデカルト以来のルビコン河は、サルからヒトへというヒト化 *hominization* の問題として、生物学の次元から進化的にアプローチされるようになってきた*。

* これらの傾向までも還元主義と決めつけるのは、いささか性急であろう。というのもサルとヒトの連続性を模索しようというのであって、後ほど述べるように、ヒトをサルに還元して、サルからヒトを説明しようというのではない。

あるいはまた、たとえば人類の形質を遺伝子レベルに還元し、人類の行動を大脳皮質のニューロン活動に還元し、それらの諸作用から人類を説明しようというのでもない。この還元された次元では、あるいは還元度によっていよいよ、サルとヒトの差違は極小化し、同質化する。しかし、この事実をもってサルとヒトが一元化し得たと考えるのも早計である。サルもヒトも酸素呼吸し、食物摂取するからといって同質視し得ぬのと同じである。

現在、このような行き過ぎた傾向が到るところで散見されるのも事実で、いかにもっともらしく説明されたところで、それは、恋愛をホルモン作用に、天才の芸術活動を蛋白分子の化学作用に求める論理と大差はない。

このような視点は、現在問題となりつつある生命科学のあり方にも大きく反映さるべきであらう。たとえば、「死」は人

間にとっては、生物学的現象以上に文化的現象であつて、このレベルを無視して生物学レベルに下降させて、ゼロ的終焉とみるのはまちがいである。サルとヒトにおいて、生の文化的内容を異にするように、死の文化的内容も異なる。

この後者の臨界領域（生命と精神との間）は、人類学にとってとくに重要なので、もう少し考察しておこう。この場合、生物学はまず生物の全体的な生き方・あり方が重視されることから出発した。それまでは、博物館に収められた一個のタイプ・スペシメン、つまり死せる一個の標本が生物の「種」を代表すると考えられてきたが、いふならばそれは死物学にすぎない。むしろ生きた生物の現象すべてを理解する努力が必要であると主張されるようになってくる。このような事情から、とくに一九五〇年以降になって、生物学で最重要ともいえる種概念がいちじるしく変化し、タイプ・スペシメンに代表される単なる形態学的な理解（形態学的種 *morphological species*）から、さらに幅広い生物学的理解（生物学的種 *biological species*）へと改められたのである。この生物学的種では、形態はもちろんのこと、生態・社会・行動・遺伝などを内蔵した繁殖共同体、つまり一生物群全体の生き方・あり方が問われることになる。

かくして、生物の生き方・あり方が個体レベルを超えた集団や社会の機構に依存していることから、動物社会学が長足の進歩を遂げた。生物が集団もしくは種として、彼らの生息する環境とどのような折り合いをつけているかということから、生態学が発達した。個体と集団や社会との、もしくは個体と環境とのあいだでみられる行動パターンやその発達過程、心的・学習的機構の解明をめざして、行動生物学もいちじるしく進展した。もちろん、このようにまとまった集団や種の集団遺伝学的研究も、重要な役割を果すようになった。

このような学問的背景のなかで、さきほど述べた霊長類学が誕生し、人類出現の論理も、この脈絡のなかで解明されるようになってきたのである。

三 人間性の萌芽

進化論が定着して以来、人類学はサルとヒトとの境界線を取り払って、連続させることに成功したかにみえる。もともと進化論とは、そのような生物の連続性を主張するものと、性急に考える傾向がないわけではなかった。けれどもそれは、サルとヒトとの身体的・生物学的特徴の連続性に限られており、精神や文化の側面はほとんど断絶したままだった。

その実情はどうだろうか。哲学は人間を理解するために人間から出発する。つまり人間であるためのいくつかの必要条件を人間から引き出し、それらが動物では欠如していることを確かめて、たしかに人間だけのものだを証明する。社会科学も人間のレベルから出発する。たとえば言語や家族や物質文化や精神文化などについて、まずそれらの基本的要素や構造などに溯及する。そしてそれらが動物の世界では見られないことを示した上で、これこそ文化や人間の本質的特徴だと結論する。いわば当り前のことを言っているにすぎず、これでは断絶の溝が深くなるばかりである。

今日まで、「人間性はどうのようにして生じ、最初はどうのものだったか」とか、「文化が発生する基盤とか萌芽は、具体的にはどうだったか」という問題も、中心課題とはいえないまでも、哲学や社会科学だけが扱いて得る領域であると考えられてきた。そして他分野からこの領域を侵犯すると、無残な敗退を喫するか、手ひどく懲らしめられた。

それが現在では、すでに述べたように霊長類の生態や社会や行動の研究を媒介にして、生物学の側から、いわばこの臨界領域にアプローチすることが可能になってきたのである。

たしかに、文化的現象のすべてを、生物学で研究しようと試みるのが馬鹿げていることは自明である。それはちょうど、ルネサンスの歴史的な性格を生物学の法則で説明するようなものだからである。けれども少くとも、ヒト化もし

くは人類進化の脈絡のなかで、生物学的に生きるサルから文化的に生きるヒトへの連続的移り変りをみていくことはできる、というわけである。

それでは、現在までの霊長類学の成果や、発見された人類化石の研究や、古環境の復元などを通じて、どの程度のことか明らかにされてきただろうか。

四 サルとヒトのルビコン河

東アフリカのオルドバイ峡谷では、自然の巨大なカレンダーともいえる地層が、整然と平行に走っている。それは大きく五層に区別することができ、下の二層から出土する化石を通じて猿人類から原人類へと進化していく様子がよくわかる。なによりも貴重なのは、猿人たちの居住跡が見つかり、彼らの生活はもとより、文化能力や精神活動のレベルもある程度知り得たことである。それまでは、長い論争の結果、猿人たちは身体的・解剖学的には、どうやら人類と認めてよいところまで議論が進んではいた。しかし、真の人類であるためには、彼らの精神活動、文化能力の存在が証明されなければならない、という問題があった。

猿人たちは、きわめて原始的な石器（オルドワン型礫石器）を発明するや否や、瞬時にして十数種の石器を使い分ける術を知った。というのも、最古の石器が出現してから、きわめて短かい先史学的時間のうちに、多種類の石器が発見されるからである。それはあたかも、過剰に蓄積された石器の製作・使用の技術能力が一挙に噴出した観がある。おそらく、チンパンジーにもみられるような、自然物を選択し利用したり、簡単な加工をして道具として利用したりする長い期間が、猿人レベルに達するまでもずっと継続し、それらの文化的能力が蓄積されていたのであろう。そしてさらに、十数種の石器の存在だけでも、彼らの生活内容の豊かさ、複雑さが想像できるといえるものである。

彼らは人頭大の石を直径約五メートルにわたって積み上げていた。その積み石が何のためかは不明だとしても、そ

の労力から考えて、なかば恒久的な目的で築造されたことは間違いない。つまり、それは彼らがすでに定住場所をもっていたことを物語っている。同時に出土する彼らの食ひ散らした獲物の動物化石から、狩猟動物が次第に大型化していったこともわかる。定住地を持ったことと、獲物の大型化という、この二つの事実から、彼らの文化程度がどれほど推測できるか吟味してみよう。

このような推測は、人によっては実証的でない、というかも知れない。しかし、実証的でなければ、その事実は存在しなかった、ということはできない。また、傍証的な必要条件から演繹して、その事実の存在を否定するわけにはゆかない場合もあり得るのである。

猿人たちがさかんに捕獲したネズミ・カエル・モグラなどのような小型動物は、居住地のすぐ傍で、ひとりでも捕獲できただろう。しかし、ウマとかゾウとかキリンのような大型有蹄類を狙うとなると、単独ではむりで、どうしてもハンティング・チームを組まねばならない。それには役割分担と協力が要求されたはずである。

また、大型狩猟を行うには、遠方まで出かけなければならなかった。この危険な遠征には、老齢化した個体や妊娠したメスや哺乳中の母子を同伴できるはずがない。前述の積み石に象徴される定住地にとどめられたことだろう。逆に遠征チームには帰るべき場所があり、獲物を持ち帰ることも要求された。ここには育児と狩猟という分業が成立していることになる。そして分業は、ある種の社会的掟に従って分配されることを前提として、はじめて成立するものである。さらに分業と分配のあるところ、人類社会の存在を想定せざるを得ない。

猿人たちの化石からみる限り、彼らの幼・少年期は少なくともチンパンジーやゴリラのそれよりも長くなっていた。これはきわめて重要なことである。まず、複雑化した社会で生きるには、それなりの社会的学習や言語的活動の習得を必要とし、それは幼・少年期を通じて行われるものだからである。

第二に、幼・少年期の延長は母子の関係が長くなったことを意味する。それに応じてオスは父性を獲得したにちが

いない。サル次元では、メスがコドモを産む限り、ハハとして存在する期間がかならず存在するが、オスはほとんど常にオスであって、社会的にチチになることはまずない。メスはコドモとの間に母子の絆を築き、オスとの間ではオス・メスの関係を保ち、またオスは期間的に長くなった母子の絆を媒介としてコドモとの間に父子の関係を成立させることになった。となると、猿人たちの間には、すでに家族もしくはそれに類似した社会的ユニットが形成されていた可能性が高い。これは今西錦司のいう類家族 *familoid* のカテゴリーに含まれよう。

このことと関連して、猿人たちのあいだでは、霊長類一般に普遍的にみられる発情季や交尾季のたぐいが、その周期性を消失してしまっていると考えざるを得ない。つまり、猿人たちのメスは生殖年齢に達してから老年までの間は、常に交尾可能であり、それは絶えずオスたちを性的に触発し、報酬を与え、特定のオスとの結びつきを強化させる機能を果した。霊長類のなかでもチンパンジーでは、ときどき食物が分け与えられることが観察されているが、そのほとんどすべてがオスからメスに対してであり、それも発情したメスに限られているようである。これらの事実から考えても、猿人たちのあいだの恒常化した性的絆 (*sexual bond*) は重要な社会的意味をもったことは想像にかたくない。つまり、もし猿人たちが依然として交尾季をもっていたとすれば、特定のオスとメスの性的絆は持続性はなく、したがって父性の出現も困難だったであろう。そうなれば家族の成立根拠も薄弱とならざるを得まい。

さらに性生活における発情は、もうホルモン支配のレベルを脱して、大脳の・社会的規制を受けていたことだろう。その萌芽はすでにマントヒヒなどの下等な猿類のレベルでも発見されている。たとえば彼らは厳格な単雄複雌の社会的ユニットを有するが、あるユニットのメスが発情したからといって、それが直ちにホルモン・レベルで他のユニットのオスを性的に触発することはないからである。つまり、そこにはホルモン支配のレベルを超えて、大脳の・社会的に規制が働いていることが見て取れる。

霊長類では社会性がよく発達しており、たとえばヒヒやニホンザルでさえ、集団内で行動が社会的に規制されてい

ることはよく知られている。「何をしてはいけないか」、「どのように振舞うべきか」という、いわばその集団の社会的掟のようなものがある。そしてそのような規制をもった集団への造反や離脱は、肉食動物と競合しながら生きる彼らにとっては、死の危険を意味する。猿人たちの集団内の社会構造は、すでに述べたように、いっそう複雑で、したがってそれに比例して社会的掟や行動規範も複雑化していたと考えざるを得ない。となると、道徳や義務の萌芽がここに読み取れるのである。

以上のような複雑性をもったレベルの社会で、自分の意志や経験を仲間や子孫に伝達・伝承するためのコミュニケーション・システムもしくは言語機能が、果たして欠落していただろうか。チンパンジーですら、ある程度の言語能力があることが立証されている。さらに道具そのものが即自的な言語機能を属性として持っている*。とすれば定型化された石器の種類が増加したり、改良されたりした事実とも考え併せて、言語機能の存在した可能性は否定できない。というより、むしろ積極的に存在したと考えざるを得ないのではなからうか。

* 道具は、学習に基づく伝承と伝播の性質を内蔵しており、視覚言語や身振り言語と同質の伝達機能をも果す。チンパンジーAが白アリ釣り用に作った小枝をもって、移動しているのを他個体のBが見ると、Bはその道具としての小枝を介して、Aが何を意図しているか瞬時にして了解する。AはBがつけてくるのをくramsために、あらぬ方向に行くふりをする。このようなありふれた行動からも、道具が伝達機能をも有することがわかる。また、他部族のものが所有している道具をみて、ただちにそれが、自分たちのどの生活行動に有用かを知る。そして学習・模倣により伝播ないし伝承される。その機能は出発点においては言語と同根である。つまり、ヒト化の初期においては、道具は有形化した言語能力、もしくは言語の化石であると思ふことができる。

このような事情であるにもかかわらず、豊富な石器類のカタログを有する原人類（そして猿人類に於いても）の間に言語活動があったことを、依然として認めようとならないのは、悪しき実証主義の名残りであろうか。

猿人たちが構成していた同族集団は、ほぼこのようなものであった。このような集団が、食物源である動物や植物などの生態条件にも左右されながら、すみ分けし、なわばりを持っていた。集団によっては、比較のおだやかなもの

もあつただらうし、緊張のみなぎつた激しい集団もあつたことだらう。それにつれて、社会的規制にも緩徐の相違がみられた。このような集団の個性をトラディションとよぶ。

いわゆる本能主導型のアリやハチのような昆虫社会では、営まれる集団の構造は画一的で、たとえば北海道と九州のアリの集団に個性的相違がみられるというようなことはない。しかし学習度の高い霊長類になると、たとえばニホンザルの集団の間でも、すでにある程度の個性的相違を見出し得る。それに比べると、すでにみえてきたように、学習主導型に大きく傾斜した猿人集団では、言語的コミュニケーションや集団規制、食生活、即自的な生活技術などのトラディションにおいて、かなり大きな集団間の差や地域的な相異が生じていたはずである。

実際にこのような観点から、現在までにかなり豊富に出土しているアジア・アフリカ・ヨーロッパ出土の原人類の遺物を見ると、集団的個性の相違があつたことは十分納得できる。猿人類についても、同じような検証を行えば、先史学的にも集団間のトラディションの違いを実証できるはずである。

猿人たち、つまり人類と、類人猿を含む霊長類一般とを比べてみると、すぐ目につく特徴がある。それはオスらしさ・メスらしさ、つまり性差(性的二型、sexual dimorphism)のあり方がまったく変つてしまつたことである。

霊長類では、オスの犬歯は、メスのそれに比べていちじるしく巨大で鋭利なのがふつうである。一般に歯といえば食物摂取用の咀嚼器官である、と短絡的に考えられ勝ちだが、実際はかならずしもそうではない。その一例がこの犬歯である。もし咀嚼用だとすると、オスとメスとで食物の種類を異にする、という奇妙な結論にならざるを得ないであらう。つまり、犬歯にみられる、この大きな性差は咀嚼用というよりは、むしろ行動学的なオス・メスの差の反映とみるべきである。オスの最大の社会的役割は、外に対しては集団を防御し、内に対しては順位性・対メス関係その他の集団内秩序を維持することだといえる。いうなれば、犬歯は集団維持のためのシンボリック特徴だともいえよう。しかし、外に対しては、犬歯は、巨大で鋭利なほど威力ある武器になり得るが、逆に内に対しては危険きわまりない

兇器となりうる。些細なトラブルのたびに、仲間に致命傷を与えることになれば、やがて自分の所属する集団の内部崩壊にもつながりかねない。それ故、オスの体に犬歯とか牙のような危険な武器を装備した動物では、常に先天的に仲間に対する攻撃行動を抑制する機構が賦与されている。たとえば、ヒヒやマカカの類では、劣位の個体は優位の個体に対して、急所である陰部を差し出す。その行動があると、優位個体は攻撃を中止して、マウンティング（馬乗り行動）を行うことにより、相手に対する征服を儀式的（ritual）に確認する。同じようにして、オオカミは自分の頸動脈の部分を、ネズミは下腹部を、相手に差し出して攻撃を躲す。

一方、人類の場合はどうかであろうか。鋭い爪や巨大な牙もなく、男性と女性の性的二型のあり方は、他の霊長類とすっかり違ってしまった。もちろん、性差がなくなってしまうのではなく、第二次性徴のあり方が変化し、男女の性的アトラクションのあり方が変わってしまったのである。

しかしその代りに、自分の体から強力な武器を喪失した人類は、道具を手にした。

道具は本来の一次的用途のほかに、状況に応じて転用が可能なるものである。平和的な根茎の掘り棒も、些細ないさかいに際して振り上げれば、兇器にもなり得る。狩猟用の道具も、仲間に転用すれば、殺人用具になる。相手を威嚇し脅かすつもりで使用したはずが、相手に致命傷を与える結果になりかねない。そして残念ながら、このような道具の多用性に対して、牙や爪の場合のように、行動学的に絶対的歯止めになるものは、人類にはまだ十分発達していない。あえていえば、集団内で後天的・学習的に身につけた道徳的・倫理的・宗教的規範への順応と、それらに感応し易い先天的感情・情緒がそれであろう。

長い進化過程で、人類と道具のかかわり合いは、まだ瞬時にすぎず、したがって人類の道具への適応が未完で未熟であるということだろうか。あるいはまた行動学上、先天的な歯止め（抑止機構）を外してしまった生物学的ヒトと、それとは異次元の技術（artificial）や道具との間に大きなずれとアンバランスが生じ、物質文化に支配される人間という

主客逆転の相が現われ始めたということであろうか。

実際にも人類の歴史を裏側から眺めるとき、人類になった瞬間から、殺人・殺りくをくり返してきたことがわかる。それを初期人類の進化程度の低さや未開性に帰せしめるわけにはゆかない。というのは、時代とともに殺人の頻度は増加し、規模は拡大してきているからである。

原人類や猿人類における殺人の事実が次々と明るみに出てきたとき、研究者たちの反論は弁護に移り、ついには沈黙に変わった。

「人が人を打ち殺して焼いて食う。これはまことに人類の行動である」といったのは、ドイツの人類学者H・ヴァイネルト(H. Weiner)である。もし、サルかヒトか定かでない化石が発見され、そこに殺人の痕跡を読み取り得たならば、その化石は人類と断定してもよい、という意味である。

E・フロム(E. Fromm)は、人類の殺人行為には動機づけがあるという。しかし、正義という実に怪しげな旗印のためにせよ、本来の宗教的目的とは矛盾するはずの異端者懲罰のためにせよ、あるいは儀式的(Hitual)なものにせよ、動機づけ、つまり行動の価値基準如何によって、殺人も可能であるというところに問題があるといえるのではないだろうか。

五 ヒト化への直接的動因

どのようにして、サルからヒトが分かれたかと問われると、とっさに、サルとヒトでもっとも違う特徴はなにか、と考え、そしてヒトは比較にならないくらい「あたま」がよいから、あたまの善し悪しがサルとヒトを分けたと思ひ込む。私たちの考え方には、このような抜き難いくせや傾向があって、偏見や間違いのものになることが多い。人類学の世界でも、一九五〇年頃までは、大半の研究者がこのような過誤にはまり込んでいた。現在では、猿人類や原人

人類はなぜ人類なのか

類がサルのあたまとヒト的あしをもっていたことから、人類はあたまからでなく、あしから進化してきたことがわかつている。つまり、人類のもっとも基本的な特徴で、サルとヒトを分ける引き金になったのは「直立二足歩行性」という特性になる。

それによると、ヒト化 (hominization) はどのように説明されるのだろうか。おそらく鮮新世の初めころ(約五百万年前)、猿人たちの祖先は森林依存度の強い化石類人猿ドリオピテクス (*Dryopithecus*) と分かれて、疎開林や低木の茂る草原へと生活の中心を移していった。そこはまた草食動物が群がり、それを狙う肉食動物が横行する、食うか食われるかの世界でもあった。

こんな所へ割り込んだヒト的サルの一群は、威力のある牙や鋭い爪をもっていたわけではなく、さりとて敵を圧倒するほど巨大な体軀をもっていたわけでもない。とくに逃げ足が速かったとも考えられない。彼らは集団的社会性を高めて危険に備えると同時に、歩行から解放されて自由になった「て」で、動物の骨や歯や角や、手ごろな石ころや棒きれを選んで道具として使用した。ときには簡単な加工や改良くらいはしただろう。

これらはすべて、直立二足歩行ができるようになったおかげであって、手が自由になり、道具を作ったり使ったりできるようになったからだ、というわけである。このようにして、手と道具の有用性が増し、噛み切り用の切歯や闘争用の犬歯の負担が軽くなり、退化することになった。以上が現在もっとも支持されている直立二足歩行説のあらましである。

しかし、ここでも先ほど述べた偏見の論理が働いていないだろうか。座標軸の原点を猿人類に平行移動させて考えみると、サルとヒトでもっとも違う特徴は直立二足歩行性である。だから、この特徴がサルとヒトを分けた、と考えてよいだろうか。

まず、直立二足歩行説がいうように、それが道具の製作・使用を促したとするなら、それはどのような道具をさし

ているのだろうか。根を掘り起し、肉を切り裂き、骨を割る道具なら、べつに立たなくとも坐ったままでもできる。狩猟・闘争・運搬・携帯の場合だけ、直立二足歩行と道具が結びつくのである。たとえ二足歩行しなくとも、チンパンジーがそうであるように、立ったり坐ったりしながら採食し、器用な手で適当な物体を選び、ときには多少の修正・加工を施しながら道具として利用した、という方が実情に合う。

それではヒト的サルは何を好きこのんで、不慣れで不安定で敏捷性にかける直立二足歩行をする必要があったのだろうか。何が直立二足歩行へと踏み切らせたのだろうか。それが道具の使用と製作だったというのが、「道具使用説」のあらましである。直立二足歩行の結果、道具を製作・使用したというのでなく、道具の製作・使用が直立二足歩行を刺激したというわけである。そして道具をうまく使い分けた結果、闘争用・捕食用・ひき裂き用の犬歯の役割は小さくなり、噛み切り用の切歯も小型化して、前歯部全体が退化する結果になった、といわれる。

しかし、道具使用説にも抜き難い欠陥がある。なぜ、同じ程度の道具使用者であるチンパンジーの前歯部が退化せず、当時のヒト的サルの方にだけ退化が生じたのだろうか。これはやはり直立二足歩行説がいうように、体幹が垂直に立つようになったので突顎性が弱まり、その結果、切歯や犬歯が小さくなったのだろうか。けれども体幹が垂直に立つことと突顎性との関係があるならば、なぜ四足性のラングール (*Probus*、アジア産ヤセザル類) で突顎性が弱く、常に体幹を垂直にしているテナガザルで犬歯が大きいのだろうか。

これまでに、猿人類のなかでも最古のグループといわれているアフール猿人 (*Australopithecus africanus*) がエチオピアのハダール (Hadar) 地方や、タンザニアのラエトリ (Laetoli) で発見されており、彼らには類人猿の影が色濃く残っている。彼らはやつと直立二足歩行性を獲得したばかりのグループである。その一段階前のヒト的サルであるラマピテクス群 (*Ramapithecus Group*) が、最近ケニアやインド、パキスタン以外に、ヨーロッパ南部や中国南部でも次々に発見され、その実態がかなり明らかになってきた*。

* これまで狹義のラマビテクスは、最古の人類化石と考えられていた。しかし一九八三年、パキスタンで、ラマビテクス（狹義）の顔面部が発見され、それが現在のオランウータンにつながるものであることがわかった。ここでは人類発生の母体群という意味で、広義に使用してラマビテクス群とした。

このグループのなかに、人類の祖先がいたことはまずまちがいなからう。彼らの生息環境は森林辺縁部や疎開林や草原であったりして、それに応じて直立二足歩行性の方向に踏み出したグループもあれば、まだ樹上依存度の高い連中もいたらしい。しかし、共通していえることは、大白歯がいちじるしく大きく、繊維性・穀粒性食物を挽き臼状にもぐもぐと噛んでいたらしい。

ところで意外なことに、野獸的象徴である犬歯は、彼らの間では現在信じられているほど小さくはなく、従って挽き臼型咀嚼運動にはかなり不向きだった。というのは突出した犬歯が咀嚼運動で邪魔になるらしく、真先に水平にすり減っている。つまり、サルから分かれてヒト化する第一歩は、どうやら直立二足歩行でも犬歯の退化でもなく、ましてや道具使用でもなく、挽き臼型咀嚼運動に適応すべく奥歯（大白歯）が大きくなることから始まったといえそうである。こう考えると、猿人類の大きすぎる大白歯も、原人類の時代になってもしばしば見られる犬歯間隙 (diastema) が、大きな犬歯を受容するための、歯列間の隙間) の名残も、現代人の犬歯の歯根部が他の歯に比べ、並外れて大きいのも、むりなくうなずけるのである。

しかしながら、このように指摘したからといって、直立二足歩行性や道具使用能力について過小評価する気持は毛頭ない。ヒト化が歯から始まったということと、その生物がヒトのレベルに達したということとは多少意味が異なる。つまり、中新世の化石類人猿 (Hominoidea) のなかには、まだ直立二足歩行性も獲得しておらず、全体としてサルレベルに留まっているが、歯だけはヒトの方向に進化し始めているものがあつた、ということなのである。これを dental hominid とよぶことがある。同じようにして、まだ現存類人猿に向けて完成はしていないが、いち早く歯牙に

ついで類人猿化する傾向のものが知られているが、これについては *dental ape* とよばれている。つまりヒト化も類人猿化も、かなり古い時代にすでに萌芽がみられるのである。

六 人類と文化のかかわり

前にも述べたように、哲学や社会科学により、文化の本質については、しばしば議論されてきた。けれども、人類にとって文化がどれほどの機能を果し、どのような意味をもってきたか、ということについて、あまり問われていないのはふしぎである。

自然の一部として生きている動物は、自分が住んでいる環境内では、まるで鍵と鍵穴のように、機械的に自然条件に反応しながら行動するのがふつうである。その生き方や行動は先天的に決定されていて、すこぶる能率がよいが、違った環境に移ることはまず許されない。動物が高等になると、この自然条件から解放されて自由性を増すようになる。そしてその分だけ、生れつきの先天的行動から脱して、判断と選択によって決定された行動をするようになる。いふなれば生物の主体性が向上するともいえるだろう。

そしてこの方が、はるかに広い環境に適応できるし、刻々と変化する周囲の条件に即応する能力も高まり、バラエティに富んだ生活することが可能になる。この行動や生活を決定づけるのが、後天的な学習である。この学習能力は、霊長類では他の動物たちとは比較にならないほど大きく、人類ではさらに飛躍的になる。その結果、本能は人類では奥深く押し込められてしまった。

自然条件に縛りつけられた動物では、たとえば気温が低下すると、移動してこれを避けるだけである。しかし人類の場合は、毛皮が保温に役立つことを知り、氷雪を防ぐ小屋掛けを学び、暖をとる火を発明してきた。このようにして人類は、自然のなかでむき出しで生活するのではなく、自然を補い、制御・克服し、開拓・改良し、発見・発明し、

生産する術を身につけてきたのである。

食生活はどうであろうか。鋭い牙と爪に頼って獲物を得る動物では、捕獲つまり摂食だった。それが道具に頼る狩猟や採集では、捕獲と摂食は分離し、間接化される。そして僅かばかりの工夫と技術と道具の改良によって、捕獲の成果がいちじるしく増大することが知られた。しかし、危険を伴い、当り外れがある狩猟や採集よりも、計画性をもった飼育や栽培の方がはるかに効率が良いのは当然である。

このようにして生産量が増大すると、人口は増加し、職業的分業が生じ、社会的階級が発生して、社会の構造は大きく変化する。余剰物は交易され、ついには貨幣が出現する。そして食物の入手は、みずからの牙と爪に代って、貨幣という手段に負うことになる。このようにして入手された食物は、各民族に特有の伝統的な方法で調理され、ここではじめて摂食が可能になる。そしてこれらの発展系列は、もはや生物レベルの現象ではない。

この脈絡のなかには、技術と物中心の物質文化 (material culture) ばかりでなく、風俗・習慣・伝統・道徳・価値観・宗教・芸術のような精神文化 (value culture) も溶け込んでいる。だから回教徒が豚を食べないのは、消化できないからではないし、また日本人がたこやいかを珍味とし、欧米人がそれらをきらうのは、べつに生理や消化酵素がちがうからでもない。宗教や習慣、つまり精神文化を異にするだけのことである。にもかかわらず、精神文化的条件は生理的条件にも影響を及ぼす。たとえば、私たちが知らずに蛇の肉を食しても、ごくふつうに消化してしまうはずであるが、知った途端に嘔吐するであろう。この段階では、もはや食は生物学的・本能的な個体維持にとどまらず、質的に転化してしまつて好みの充足と満足感が目的でさえある。

性についても、種族の保存と維持という生物学的な初期の目的は内包しながらも、大きく質的に変わってしまった。男女の出会いが、そのまま性的結合を意味するわけではない。成人式や婚約や結婚などの儀式を経て、出産や育児があり、そこには愛とか信頼とか社会的独立性その他の精神的なものが、縦糸のように貫いており、形而上的レベル

への昇華がみられる。だから、人類はもはや、生々しく赤裸々な本能丸出しの動物ではなくなっている。

性にも食と同じように、好みの充足とか満足感といったアミューズメントの報酬があることは確かであろう。しかし、性にまつわる行動は先天的に決定された機械的で融通のきかないものではなく、性を享楽だけで受けとめるか、芸術や文学や宗教への昇華を求めるか、その選択は自由である。そして、その場合、選択のための行為基準つまり価値が求められるようになる。より自由度の少い犬とか猫では、その分だけ行動は先天的・機械的である。逆に言えば、犬や猫は、犬や猫以上に行動できないし、また犬や猫以下にも行動できない。しかし、選択の自由性を獲得した人類では、神に近い行動はもとより、犬や猫以下の行動をとることも可能になったのである。人類の裏側にみられる愚行の歴史は、このことを雄弁に物語ってしよう。

これらの例でもわかるように、人類はもはや純粹の動物ではなくて、自然界において独特の地位を占めている。だから、動物のしぐさや生き方を人になぞらえ、擬人化して解釈するのは正しくない。しかし、サルたちがなわばりや順位をめぐる争う世界に、人間のすがたを投影し、あてはめてみるのが擬人化の誤まりならば、人間の行動や生活のなかにサルを見て、人間を擬猿化して「裸のサル」として扱うのも行き過ぎであろう。サルが毛の生えた人間ではあり得ぬように、人間も毛のない裸のサルではないのである。

人間は生まれ落ちた瞬間から、すでにその集団や社会のもつ文化やトラディションの網ですくい上げられ、学習によって自分の行動の仕方をつけていく。そのため、人間の行動には狐疑逡巡がつきものである。その行動にはかがり火に一直線に突入する、あの夏の夜の虫のような見事さや明快さはみられない。そういう意味では、人間はたしかに「本能が欠如した欠陥動物」であり、「いまだ確立せざる動物」と断定する哲学者たちの指摘は、その通りである。しかし、これこそ、自然条件への従属的・機械的・盲目的反応から脱して、不完全ながらも、みずから行動を選択し、決定する行動的自由を獲得した代償であるといえないだろうか。そして行動の選択基準として、終着駅的な

い線路の上を走る列車に似て、価値や理想を求める道を歩み始めた未完の人類の姿が、ここにも見られるのである。

七 自己家畜化

生物はすべて進化する。しかしその速度は生物の種類によって異なる。それぞれ比べてみると、人類は異例のスピードで進化してきたことがわかる。人類が類人猿として過した時代を約二千五百万年だとすると、その最後の十分の一の時期に直立二足歩行が出現した。それからは脳が急に大きくなり、逆に野獸的な印象を与えるあごや犬歯は、すっかり小さくなってしまった。

せいぜい六百立方センチほどの小さな脳をもった猿人たちから、原人類では九百〜千二百立方センチ、旧人類や新人類では千四百五十立方センチと、たった二百万年くらいの間に、脳の大きさは倍以上になってしまった。これは生物の進化速度としては異例である。しかも、この脳の増加曲線が、文化遺物に象徴される・人類の技術や文化能力や精神活動の高さと、みごとに平行しているから興味深い。

脳の「異例の進化速度」と「文化の発達との平行関係」という、この二つの事実は重要なことを物語っている。まず、どの動物をみても、よりうまく生き延びるべく、自然の条件に合わせて、自分の体の形や構造を改造・変化させてきた。たとえば、肉食獣は、獲物に音もなく接近し、瞬発力を利用して襲いかかり、一撃で獲物をたおすべく足の構造を変え、鋭いかぎ爪や牙を装備した。一方草食獣は、逃げ足の速度をあげ、持続性が得られるように、四肢の構造を根本的に改造しながら、指の数を減らし、爪はひびづめに変えてしまった。

この例でもわかるように、一般の哺乳類や霊長類では、自分自身の体や器官の基本構造を、ある限られた生活条件に適応すべく、破壊してまで改造していることが多い。このような現象を特殊化 *specialization* とよぶ。特殊化は生物がある特定の生活環境に生きる限り、きわめて好都合だが、その環境が変化すると、適応できなくなることが多

い。

それに比べて人類はどうだろう。直立二足歩行という特殊で無理な姿勢と運動様式に適合すべく、本来は把握性の足の構造はすっかり壊れてしまった。これは明らかに特殊化である。その際、血管系や骨格系や神経系器官などは、四足動物時代の構造から、さほど改良されなまま立つようになったために、その不釣り合いが原因で生ずる障害や病気も多い。生物としてもっとも重要なはずの出産ですら、直立したために無理な負担がかかり、その上、生物界では異例の大頭赤ん坊を産まなければならなくなったので、難産が宿命づけられてしまった。

しかし、歩行から解放された上肢や手が、つまり直立二足歩行が、人類の生活様式の多様性と内容の豊富さを生み出す原動力になったことは否定できない。この事実を目を向けると、直立二足歩行は特殊化にはちがいないが、ほかの動物の例とは逆に、生存条件を狭めるどころか、いちじるしく拡大してきたことがわかる。だから差引き勘定の上では、十分採算がとれたといえよう。

けれども、このような基本構造の破壊を伴った進化的変化つまり特殊化は、人類では直立二足歩行にとどまる。異例の脳増大には基本構造の破壊がみられず、脳本来の機能をさらに向上させるための、いわば改良と増築だけが生じた。爬虫類の脳（R複合体）の上に哺乳類の脳（大脳辺縁系）が加わり、それに人類の脳（新皮質）がとり囲んで三位一体化したのが人類の脳であって、それは機能の限局化・特殊化を遂げたものではない。だから、人類は直立二足歩行を土台として大脳皮質増大の路線に沿って、向上進化（*elevation, Anagenesis*）してきた、といつてよい。

この事実と関連して、人類はたとえ打つにはハンマー、裂くには刃物、突くには錐といった具合に、手の延長である道具の形や構造を変化させることによって、直接自分の体に変化（特殊化）が及ぶことを避けてきた。だから、霊長類のなかでも、もっとも基本的で原始的な体の構造を保持するように向上進化してきたもの、それが人類であるということさえできる。

人類はなぜ人類なのか

人類の有するこのような特徴、つまりは技術や道具などの物質的文化のおかげで、近縁のすべての類人猿が、恒常的な気温低下とともに赤道近辺に封じ込められ、衰退・絶滅へと転落していくさまを傍目にみて、ひとり人類だけが、絶滅の危機をくぐり抜け、逆に繁栄への途をまっしぐらに進んできたのである。

しかし、結構ずくめの話ばかりではない。文化や技術は、人類の体自体に変化が及ぶことを斥けてはきたが、ついには、体や心の進化が停滞したまま、技術や物質文化の進化が先行し始めたのである。つまり主客が逆転して人類の自己疎外化が顕在化してきたのである。

わかりやすい例として、家畜のブタと野生のイノシシについて比べてみよう。両者は生物学的には同種である。つまり外観がイヌとネコほどに異っていても、子供(子)も生まれるし、その子供が性的不能になることなく、孫(孫)を生むこともできる。ではなぜ、このような差異を生じたのだろうか。

ブタでは、食うことも気候の変化も外敵の防衛も、交尾や出産や育児も、すべて人間の手により制御され、管理されている。ところが、それらはいずれも生物にとつては基本的な生存条件であつて、野生のイノシシの場合には、みずから命がけで処理してゆかねばならないことばかりである。

その結果、ブタでは脳や中枢神経系は低質化するし、感覚や行動は鈍になり、攻撃性は弱まり、牙は退化し、頭部が変形するなど、ほんの数世代で形態・生理・心理そのほか体のすみずみまで変化が及んでしまった。人工条件下で飼育した結果生ずる、このような変化や現象は「家畜化」(Domestication)、とよばれ、金魚から人類まで共通するものがある。

では人類の場合、実情はどうであろうか。人類は進化の過程で、自然環境を技術的に制御・改良し、火を発見・利用して、飛躍的に人工的・文化的環境を築き上げ、そのなかで生活するようになった。環境が単純化する他の家畜と

は逆に、複雑化する文化的・生活条件のために、脳の低質化こそ避けることはできたが、体毛や皮膚・目・毛髪の色や形その他の形質の変異性が大きく、皮下脂肪が増え、頭骨の形までが変化するなど、家畜と共通する現象が多い。

つまり、人類もりっぱな家畜の一種であり、進化の異例の速さも、このように理解すればうなずける。逆説的にいえば、「人類が文化を創造したのではなくて、文化が人類を創り出した」(E. Hackett: 1984)のである。だからもし、原人類が技術・文化を発達させなかったなら、人間は今もお原人の顔かたちや体つきをして、山野を駆けめぐっていることであろう。

ところで、家畜の場合には、病気に強くするとか、皮下脂肪を調節するとか、多産や良質の乳量の増加を図るとか、その他つねに明白な育種目標・経済目標がある。それらの目標に向って、野生原種に人為的操作を加えて得られたのが家畜なのである。

けれども人類の場合はどうであろうか。生存の危機が訪れるたびに、それに対処すべく技術・文化を発達させ、直接的で苛酷な自然条件を、制御・改良することにより間接化させ、このようにして築き上げた人工的環境条件下で生活を営んできた。しかもそのおかげで、衰退していく近縁の類人猿グループを横に見て、ひとり繁栄の道を歩んできたのが人類である。このようにみえてくれば、たしかに技術や文化が人類の危機を救済し、生活を充実させ豊かにしてきたことは、まちがいない。しかし、これから先、限りなく生活環境が人工化していく流れのなかで、家畜の経済目標に相当する人類の生存目標は何であろうか。もし生存すること自体が目標であるとすれば、それは向上的 (evolutionary) でなければならぬ。なぜなら、生物進化の法則として、繁栄を極めた生物ほど自己崩壊の危険を内蔵しているわけで、人類の場合も例外ではないからである。人類を危機に追い込むのは、他の競合生物ではなく、人類自身だというわけである。

人類がみずからのために、みずから創り出した技術や物質文化が、あたかも生命を吹き込まれたフランケンシュタ

人類はなぜ人類なのか

インの怪人のごとく、自己の意志に従って動き始めた。そして現在では、それらは巨大な利潤追求型産業や消費文化と化し、生活の充実どころか、人々の物的欲望を際限なくき立て、現代人の心は満たさるべくもない欲求不満にさいなまれる結果となってしまった。向上的生存目標のないまま、人類は産業論理の急流のなかに身を投じた恰好になつてゐる。

このような生活内容の激変に比べれば、十万年この方、人類には身体的・情緒的になんら本質的な変化が生じていない。旧人類ネアンデルタール人と現代人は、生物学的・解剖学的には同一種であつて、せいぜい亜種レベルの違いを示すにすぎない。喜怒哀楽の情緒や宗教的・精神的能力もほとんど現代人と異ならない。それにもかかわらず、彼らのムステリアン文化の生活と、現代の超産業化社会の生活とでは、水中生活と陸上生活ほどの質的な違いがある。脱野生化とか豊かな生活といえば耳ざわりがよいが、それはつまるところ、生活環境の人工化を意味しているわけであり、人類も生物の一種である限り、そのような環境の激変に対しては適応能力に限界があることを悟らねばならない。十万年前のネアンデルタール人とさほど違わぬ身体と情緒を以て、純人工的環境に近い超過密の近代都市に生活する現代人のあいだでは、暴力・非行・自殺・ノイローゼその他の、いふなれば産業化社会拒否症候群が、いちじるしく増加してきている。これこそ、人類の悲鳴でなくて何であらう。

その人類が、今後ますます急加速度で人工化する生活の変化の流れのなかで、どれほど耐えることができ、どちらに向いて進化するのか、その予測はややもすれば悲觀的にならざるを得ない。まさに、「人類にとって人類がオオカミ」であり、生存と種の維持にとって、自己矛盾的な、内部崩壊の最大の危機要因がここに見られる。

この人類の苦境から脱出し得る方策としては、今のところ、あまりにも肥大化した物質文化と調和し得るような精神文化の発達、つまり物質文化からの脱皮と人間精神の復活に期待するしかないと思われて仕方がないのである。(了)

本稿は、筆者の江原昭善教授が昭和五十七年度、京都大学文学部で「人類学からみた人間の本性」と題して講義された内容の一部を、請うて御執筆いただいたものである。〔編輯者〕

（筆者 えはら・もきよし 京都大学・靈長類研究所〔系統〕教授）

文献

- 江原昭善〔一九七二〕『自己家畜化現象』（自然）Vol. 26, No. 4, 中央公論社）
- 〃〔一九七二〕『人類学からみた化石人類の言語的生活』（言語）Vol. 1, No. 7, 大修館書店）
- 〃〔一九七四〕『ホミニゼーションとは何か』（言語）Vol. 3, No. 11, 大修館書店）
- 江原昭善・渡辺直経〔一九七六〕『猿人——フウストラロピテクス』（自然選書 中央公論社）
- 江原昭善〔一九七九〕『猿人類の起源と系統をめぐって』（科学）Vol. 49, No. 11, 岩波書店）
- 〃〔一九八二〕『化石人類の言語』（言語）Vol. 11, No. 1, 大修館書店）
- 〃〔一九八二〕『人類の地平線』（創造選書 小学館）
- 〃〔一九八三〕『人類学からみた殺人の論理』（『本』五月号、講談社）
- 〃〔一九八三〕『人類——ホモ・サピエンスの道』（NHK）ナタス 日本放送出版）
- Fisher, H. E.〔一九八二〕*The Sex Contract; The Evolution of Human Behavior*. William Morrow & Company, Inc. New York. (翻訳『結婚の起源』伊沢・熊田訳 自然選書 学芸社)
- Mayr, E.〔一九五〇〕*Taxonomic categories in fossil hominids*; in Cold Spring Harbor Symposia on Quantitative Biology, Vol. 15, ed. by R. G. Harris, New York.
- Overhage, P.〔一九六一〕*Das Problem der Hominitation*; in *Questiones Disputate*, herausgegeben von K. Rahner u. H. Schlier, Herder, Freiburg, Basel, Wien.
- Washburn, S. L.〔一九五〇〕*The analysis of primate evolution with particular reference to the origin of man*; in Cold Spring Harbor Symposia on Quantitative Biology, Vol. 15, ed. by R. G. Harris, New York.
- Weinert, H.〔一九五一〕*Der geistige Aufstieg der Menschheit*. Ferdinand Enke Verlag, Stuttgart.

THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article.

Consideration on “What is mankind?”—Man, the incompleting one; from the viewpoint of physical anthropology.

by Akiyoshi Ehara
Professor of Systematics and Phylogeny,
Primate Research Institute,
Kyoto University

I. Principal subject of physical anthropology

Men, wherever they were, have always asked themselves “What are we?” This question has always been found in tribal beliefs, folklore, religion, philosophy, literature and finally found its way to science. This universal tendency of mankind emerged originally from the profound psychological base of adaptive strategy to intensify the sentiment of the same blood ties.

II. Hypothetical essay on the linking between man and the non-human primates

Physical anthropology “evolved” in the 1950’s. This “evolution” accompanied the development of Anthropology as well as the development of Biology. This tendency promoted the emergence of a new science, Primatology; it also made it possible to determine the boundary area

between organic (biological) and superorganic (cultural) dimensions.

III. *The way of life of Australopithecus groups based on the reconstruction of their living sites*

When mankind emerged, men already possessed important attributes such as fathership or family, the ability for making tools, and language. These attributes are mutually related and are usually used to recognize the beginnings of humanity. Mankind leaped from "instinct behavior" which is to react passively and mechanically to environmental stimuli to behavior determined by past experiences through social learning. In order to do this, man had to always establish the standard (criterion) on how to behave. This criterion may not be always absolute and endless to establish. This is a compensation for acquiring liberty from nature. The incompleteness of human acts are based on this point.

IV. *Primary motive for hominization*

It is certain that bipedalism is the most important attribute of the Hominidae. But adaptive change emerged earlier than that. There are many fossils which show signs that they were on the road to bipedalism. Therefore, bipedalism is one motive for hominization. The hypothesis of bipedalism was examined in comparison with the tool-using Hominidae.

V. *Relation between man and culture*

Human activities such as lifestyles or social behaviors which were originally biological changed qualitatively by being in contact with culture.

VI. *Self domestication*

Morphological, physiological, and ethological characteristics of man were possibly shaped through evolution by living under the artificial environment produced by human cultural activities. It may be thought that this phenomenon is similar to animals who later became domesticated.

Therefore, we call this phenomenon “self-domestication”. In another aspect, culture (especially material culture) has estranged man.

On the Idea of Prototype

by Toshitaka Hidaka
Professor of Comparative
Physiology,
Department of Zoology,
Faculty of Science,
Kyoto University

Human being has a strong tendency to look for the ‘Prototype’. The search for the Prototype has been the source of biological studies also.

It is certain that this tendency derives from our method of recognition by comparison. When resemblance and difference are recognized among objects, we are tempted to suppose a common ancestral type of those objects. This ancestral type is perceived as the Prototype.

Wolfgang von Goethe, who proposed the concept of *Typus* or *Urtypus*, appears to have believed in real existence of *Protoplant* (*Urpflanze*). Later, however, he renounced this idea and realized that the *Urpflanze* was only a conceptual *Idealtypus*. But in the field of biology the search for really existing prototype has been continued, according to the concept of homology.

The concept of homology and phyletic evolution leads directly to the idea of Prototype. But in the comparative morphology which represents the most typical comparative way of biology, the Prototype proposed by a researcher often differs from that proposed by another. This denies the absoluteness usually attributed to the Prototype.